

北極を取り巻く国際秩序に関する
報告資料

高畑 洋平

公益財団法人日本国際フォーラム 常務理事・上席研究員

グローバル・フォーラム 執行世話人

慶應義塾大学 SFC 研究所 上席所員

1. 「分有化」とは何か

国際秩序は、単純に崩壊しているのではなく、一つの普遍的な原理によって統合される秩序から、安全保障、資源、科学、環境、インフラなどの機能ごとに、異なる主体が部分的に管理する秩序へ移行している。

分有化＝大国間競争と制度的空白の下で、明示的な合意を伴わないまま、秩序の管理権限が機能別に分散・固定化される構造

- ・ 「勢力圏」：地域と支配主体が比較的明確
- ・ 「ブロック化」：価値・制度を共有する陣営への分裂
- ・ 「多極化」：国家間の力の分散
- ・ 「分有化」：誰が、どの分野を、どのように管理するかという秩序の運用構造

キーワード：

「対立か協力か」ではなく、対立しながら協力する世界

2. なぜ北極が世界秩序の「先行モデル」なのか

北極では、気候変動、大国間競争、制度の機能不全、機能別協力が同時に進行している。

- ・ 気候変動：海氷減少が航路、資源、軍事、環境の条件を変化
- ・ 安全保障：ロシアと NATO の対立、米国の戦略的再関与
- ・ 中国の進出：科学調査を入口に、航路、資源、深海技術、インフラ、制度形成へ関与を拡大
- ・ 制度的空白：北極評議会は安全保障を扱わず、ウクライナ侵攻後は機能が停滞
- ・ 機能別秩序：海洋法、船舶安全、漁業、科学、環境を個別制度が支える

具体例

・ 延長大陸棚

各国は軍事力によって北極点を奪い合うのではなく、海底地形・地質データを国連の大陸棚限界委員会へ提出。

科学が範囲を示し、外交が境界を調整し、国際法が手続きを支える。

・ 中国の北極進出

「近北極国家」を掲げ、科学、造船、衛星通信、海底探査、国際機関への参加を組み合わせ、北極における持続的な制度的プレゼンスを形成。

中国の北極戦略は、活動空間の「拡張」から、科学・制度・経済・安全保障を総合的に運用する新段階へ移行しつつある。

3. 南極条約から北極へ——平和構築モデルの変化

南極条約を通じ、国家間対立を残したまま平和的国際空間を形成する可能性を研究。

南極	北極
主権主張を棚上げ	沿岸国の主権・海洋権益が存在
非軍事化	核抑止・北米防衛・NATO と直結
科学協力を中心とする包括的制度	海洋法、科学、漁業、安全保障などの機能別制度
一つの原理による制度的統合	統合なき機能別秩序＝分有化

南極条約を北極へそのまま移植することはできない。しかし、

- 解決困難な対立を直ちに解消せず、制度的に管理する
- 科学を共通言語として協力回路を残す
- 協力可能な領域を政治対立から可能な限り守る

という制度的知恵は、北極にも活用できる。

4. 改訂版「我が国の北極政策」に必要な5つの視点

1. 科学を外交資産へ転換する

観測データを蓄積するだけでなく、海運、漁業、環境、安全保障、国際ルール形成へ接続する。

2. 低政治領域の協力回路を維持する

気候観測、海洋環境、搜索救難、汚染防止、漁業、先住民社会などを、政治対立から可能な限り切り離す。

3. 機能別制度を実務的に接続する

新たな包括的「北極条約」ではなく、海洋法、IMO、CAOFA、科学協力など既存制度の隙間を埋める。

4. 経済安全保障と開放性を両立する

港湾、通信、海底ケーブル、重要鉱物などに、透明性、環境基準、データ管理、安全保障審査を組み込む。

5. 北極とインド太平洋・ユーラシアを一体的に捉える

欧州・大西洋とインド太平洋を結ぶ広域的な接続空間として北極を位置づける。

以上